

# 関まつりの浦島山車（常盤町）の現状

佐藤颯人

## 1. 関市の山車

### 1-1 関まつりでの山車の役割

関まつりは春日神社で行われていた祭りが発祥である。関まつりはもともと鍛冶職のみの1年に1回の祭りであったようだが、江戸中期には一般化した。

現在祭で使われる2つの山車は、岐阜県の県指定重要文化財（有形民俗文化財）に指定されており、関まつりの際には町を巡行しながら、要所でからくりを披露する。最後は春日神社の境内に到着する（関市教育委員会 1996、552-557 頁）。昔は山車を女性が曳くことが禁止されていた。

関では名古屋型山車をとる。その理由は、関町は江戸時代初めには尾張藩の所領になっており、文化は名古屋の影響を受けているからであるという（水野 2003、120 頁）。

また、常盤町浦島山車保存会副会長の高辻登氏によると、明治初期の廃藩置県により尾張藩というスポンサーがいなくなったことで、名古屋において山車の売却が頻繁に行われ、名古屋型山車が周辺に広がったという。神輿中心であった祭りに明治時代から山車が追加されたようである。かつて8基の山車が存在したが、維持と管理の困難さから、戦後すぐには本町1丁目、本町3丁目（呉服町）、常盤町の3町のみが山車を所持し、それ以外の山車は他の町へ売られていった。このうち本町1丁目と常盤町の山車は1954年の伊勢湾台風により蔵ごと倒壊し、壊滅的な打撃を受けた。いずれの町でも山車を復興するか、断念するかで議論がなされ、常盤町のみが復興を決定した。なお山車を廃止してしまった町も行灯神輿を精力的に作っている。

山車は関まつり中に3度巡行する。1度目は土曜昼の本町パレード、2度目は夜の行灯神輿コンクール、3度目は日曜の巡行である。山車の巡行路は3度それぞれ違っており、第3土曜日は神明神社の本楽、日曜は春日神社の本楽であり、山車の巡行も氏子となる神社の山車の巡行に影響を与えている。土曜日夜の行燈神輿コンクールでは、神輿の前に先頭として山車が入場し、山車を回す。この順番は加茂山車、浦島山車で1年ごとに交代である。この時浦島山車は枠をつけた上でそこに200個の提灯をつけて巡行する。30年前まではろうそくで火をつけていたが、現在は豆電球で明かりをともしている。関市協働推進部文化課長兼文化会館長の後藤基次氏によれば、以前には提灯が電線に引っ掛かり停電させたり、山がずり落ちてけが人が出たりすることもあったという。現在は山車の高さを調整することで対応している。

### 1-2 浦島山車

浦島山車（常盤町自治会管理）はからくり屋台で、構造は2層4輪である。前人形の魔振りは1903年に旧来は蛸ざい振り人形であったものを唐子ざい振り人形に改めたものである（図1）。人形の操者は3人で、20本の糸を操って人形を操る。道中の動きはからくりの釣り

竿を担ぐ浦島太郎が竿を差し出した糸の端に、魔振り人形が鯛をつけたところを浦島が釣り上げる。1959年9月の伊勢湾台風で山車蔵が倒壊し、山車も全壊した。翌年修理が行われる(関市教育委員会1994、984-985頁)。山車蔵が倒壊した直接的原因は山車蔵の隣に生えていた大木が倒れた際に山車蔵が根元から持ち上げられたためである。1987年に山車を解体しての大修理が施され、1992年からくり人形・大幕・飾金具を修補した。高辻登氏によると、山車自体は約3トンで、下に太鼓をたたき子供3人が乗り込み、更に笛太鼓を吹く人と人形を操る人が乗り込む。前方に左右各3人ずつ計6人、後ろ4人で山車を曳く。なお山車の向きを変える際には梶を使わず人力で行う。山車は解体せずそのまま山車蔵に収納する(写真1・2)。山車蔵前に山車の出し入れをしやすいするための溝が作られている。



図1 浦島山車

水野2003(41頁)より転載

山車は御殿造り、屋根銅板葺、高さ462.0cm(最大)、間口130.0cm、奥行き212.0cm、舞台面積2.3m<sup>2</sup>である。1895年頃に名古屋市円頓寺から購入したものであるが、製作された年代は不明である(関市教育委員会1994、984-985頁)。高辻登氏によると、魔振り人形の右股に「弘化三丙午年細工人門前町 竹田源吉」とあるため、山車自体もおそらく同年代に造られたと考えられる。門前町とは名古屋市中区門前町、源吉は竹田屋の屋号で天保年間末から人形細工を専業としていた(関市教育委員会1994、986-987頁)。高辻登氏によると、浦島人形は土井新三郎の作、大幕は無文緋羅紗地で京都の龍村美術織物制作のもの、金具は高山の舞台会館に修理を依頼している。

なお浦島山車のお囃子についても関市の重要無形民俗文化財となっている。お囃子は9つ存在しており、巡行の際に演奏されるほか、関祭りにおいて春日神社で行われる童子夜行(どうじやこう)でも1曲演奏される。

写真1 浦島山車(収納状態)  
(筆者撮影)写真2 山車蔵(左)と倉庫(右)  
(筆者撮影)

## 2. 浦島山車の現状と課題

関祭りにおける山車の巡行や山車の保存管理体制について詳しい資料はない。そこで今回、常盤町浦島山車保存会副会長の高辻登氏と関市協働推進部文化課長兼文化会館長で常盤町在住の後藤基次氏に聞き取り調査を行った。

### 2-1 巡行

1 日目は、まず朝に春日神社の境内のそばにある山車蔵から山車を常盤町まで引っ張り、そこで飾りつけをする。昼、町内を1周した後に末広町を通り、門町通りに出たのち、神明神社前で山車を回す。その後文化通りまで行った後引き返し、太平町、大門町、春日町を通過、山車蔵に戻り宵山の準備をする。行程 4.0km、23 町を回る (図 2)。

夜は末広町を通過して本町 2 丁目へ行く。ここが行灯神輿コンクールの審査会場となっている。加茂山車と浦島山車が年ごとに番を交互に回している。終わったら栄町へ行き、国道を通過して常盤町に戻ってくる。行程 2.5km、19 町を回る (図 3)。

2 日目は千年町を通り、そこから栄町まで行く。貴船神社に入ったのち、常盤町を通過して春日神社に入ったのち神事を行う。日曜日は貴船神社と春日神社が本楽であるため 2 日目に行く。加茂山車の方は神明神社のお宮の横に山車蔵が存在する。また本町 3 丁目は氏子となるため神明神社でからくり奉納を行う。常盤町は貴船神社と春日神社でからくり奉納を行う。春日神社は東口から入り、春日神社に到着後山車を 2 回回したのち、春日神社内の童子夜行に参加する。春日神社には南門も存在するが、南門は段差があるうえ、入ってまっすぐの場所にある能舞台の隣に山が通ることができるようなスペースがないので、山車は南門から入ることではない。童子夜行とは春日神社にて 4 月第 3 日曜日に行われる神事で、県指定無形重要文化財に指定されている。童子夜行は春日神社の氏子が集まるものであるため、本町 3 丁目は参加しない。なお常盤町が童子夜行の神事芸能で笛を吹き始めたのは 1894 年からである。終わり次第山車を山車蔵に戻す。行程 3.0km、17 町を回る (図 4)。2 日間の行程を合計すると、8.0km、59 町を回る。日曜夜には「流し」や「後山」と呼ばれる地域巡行が行われた。肩掛け式の小太鼓や笛を鳴らしながら 5～6 人で関町を 1 回りする。夜祭りが終わった後なので、祭りの余韻を関町の人々は楽しんだという。しかしながら後藤基次氏によると 2005 年ほどから巡行はしていない。

なお、本町 3 丁目は神明神社の氏子圏であるが、春日神社・貴船神社のいずれでも山車を回し、からくり奉納を行う。

### 2-2 保存と修理

浦島山車はもともと自治会で保存管理を行っていたが、浦島山車が岐阜県の重要有形文化財になった際に、浦島山車保存会を設立した。現在日常の管理は自治会長が、山や祭りに関しては保存会長がそれぞれ責任を持っている。関祭りの際は町内全体のお祭りとして自治会長と保存会長が連携して祭りを遂行する。

提灯の飾りつけの方法等は、保存会が管理している。保存会の人数は 19 人で、保存会中心にお囃子の練習や計画案の策定、修理の手続きを行う。また定期的に山車蔵を巡回し、山車蔵周りの木の管理も行っている。1 年に 1 回大掃除は、掃除の負担が大きいため今年は町の婦人

会に掃除を依頼した。

現在山車の修理にあたっては、県が2分の1、市が4分の1、地元が4分の1を負担している。修理に関しては、まず修理業者に値段を聞いて把握した後に市の文化課へ報告する。市の文化課が県に申請し、許可後に市の許可を得る。双方ともに得られたら修理を依頼できる。その際、市の文化課・町・業者間で契約書を交わす。しかし修理費用の4分の1といえども、町の負担は大きい。修繕費は自治会費、祭礼祝儀や町内からの寄付、前年度の運営費の繰越金等からまかなっている。また関市からの助成金と春日神社からの協力金も運営に役立てている。山車の急な故障にも耐えられるように地元では常にある程度の資金を準備しており、修理の際に特別に資金を町内から集めるといふことはしない。これは伊勢湾台風の際に再建するかしないか町内で投票した際、1票の差で存続が決まったが、反対する人も多かったことが影響している。

### 2-3 担い手の減少

現在の浦島山車運営の最大の課題は人の減少である。常盤町では子供・青年世代の減少が深刻な問題となっている。お囃子等は町内の子供が担っているが、子供の減少により演奏者のなり手が少なくなってきたため、何年か前から住人の外孫に範囲を拡大して勧誘を行っている。関祭りの本町パレードで行われる学校行事との折り合いをつけるのも苦勞する。お囃子を後世に伝える人材の減少も深刻であり、子供たちが成人した後、名古屋等へ仕事で転出するため、後の世代に伝えることができない。常盤町は常時36世帯、土地所有者やアパートの住人を合わせて46世帯である。普段の36世帯だけでは祭りの運営は難しく、祭りの際には遠くに出た人に手伝いのために戻ってもらったりしている。童子夜行の笛の担い手も減少しているが、それは常盤町だけでなく、春日神社のすべての氏子圏の町が直面する課題だという。山車を曳く人の減少に対しては、現在中部学院大学の学生にアルバイトとして曳いてもらっている。

### 【謝辞】

この報告を執筆するにあたって、常盤町浦島山車保存会副会長の高辻登様、関市協働推進部文化課長兼文化会館長の後藤基次様、春日神社宮司伊佐地金嗣様にご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

### 【参考文献・参考資料】

- ・植木行宣(2001)『山・鉦・屋台の祭り 風流の開花』白水社
- ・植木行宣・田井竜一(2005)『都市の祭礼 山・鉦・屋台と囃子』岩田書院
- ・植木行宣・福原敏夫(2016)『山・鉦・屋台行事 祭りを飾る民俗造形』岩田書院
- ・関市教育委員会(1994)『新修関市史 考古・文化財編』関市
- ・関市教育委員会(1996)『新修関市史 民俗編』関市
- ・関市教育委員会(1999)『新修関市史 通史編 近世・近代・現代』関市
- ・独立行政法人国立文化財機構(2009)『日本の美術 516 山車』株式会社ぎょうせい
- ・水野耕嗣(2003)『岐阜県の祭り屋台』岐阜新聞社



図2 山車順行路 1日目昼 地理院地図を使用



図3 山車順行路 1日目夜 地理院地図を使用



図4 山車順行路 2日目 地理院地図を使用